

るのは衛生兵である。負傷者にとつても、戦闘員にとつては助けの神と頼られるのが衛生兵であつた。自ら負傷した都築氏の衛生兵魂があつてこそ、衛生兵は兵から頼られる小隊の軍医なのである。

応召、大作戦に参加、

労苦の思い出

愛知県 吉田新一

昭和十二年八月、支那事変勃発、毎日のように応召があり、わが村からも次々とお国のために出征兵士を送り出した。昭和十六年には大東亜戦争に突入、翌年十月十四日に令状を受け、二十八歳で初年兵として輜重兵第三連隊に入隊、第二中隊隊員で、毎日の訓練に苦労した。

いよいよ五十五日の検閲。早朝五時出発、名古屋の東山より守山小幡ヶ原と演習し、夕方五時帰隊、一通りの検閲は終了した。秘密裏に中国方面に出征するこ

とになり、二日間の休養で私宅に帰り、いつ出発するか秘密であるため連絡はできないが「出発間違いなし」と誓い、留守中は皆元気で暮らすようにいつて帰隊した。

十二月十七日、中国幸第三七一一部隊に向かつて真夜中に部隊を出発、機密の中にもお見送り多数。名古屋駅に向かつていた途中、納屋橋にて小休止、親戚衆一同のお見送りを受け、名古屋駅より列車に乗り宇品港に到着。十八日に出港、波高い玄界灘では二十分後に大波が打ち寄せ、三千名乗組みの輸送船も木の葉のようで前に進めず、全員船酔い、食事を取る兵はほとんどなし。約十時間後に前方に島が見えてきた。おそらく想像した釜山港でした。

上陸と同時に貨車に乗り北支回りのため、夜中に小便がしたくとも戸は開きません。北支の十二月は零下何十度で戸は凍りついています。貨車の中で用便を済ませた。夜が明け、日が射してくると貨車の屋根より凍り付いた氷が溶けてポツポツと落ちてきた。着いたところは浦口の港。夕方、対岸の南京に上陸、城内で

二日間の休養、翌日漢口目指し揚子江を上り、二十六日に漢口に上陸、無蓋貨車に乗り廣水駅着。休む間もなく徒歩にて湖北省応山輜重連隊着。応山南門街連隊本部の営庭に集合。

その時は第三次大別山作戦の留守隊長・松崎中尉殿受領。早速、装具をその場に置かせ、中尉殿いわく「裏山のあの望楼を回って早いものより一列に並べ」と指示あり。息絶え絶えにて前より二番目に並んだ次第です。

全員帰着後、前より五名はその場に残り、「あとの全員は装具を付け、各中隊より受領に来ている上官の指示に従い命令を受けよ」とて、各中隊に引率されて行きました。後に残った五名の兵隊は「本部の一員として残り、一生懸命勉強し、体に気を付け、連隊本部のため頑張れ」といわれました。私は残留一分隊（深谷分隊）に編入され、翌日より教育訓練など忙しい毎日でした。

昭和十八年一月十六日、大別山作戦より帰隊した戦友の衣服の洗濯、食事の世話、後片付けの繰り返しで

あった。四、五日後より応山東門街の教育隊（一中隊長の事件にて下士官以下兵まで営倉と同じ刑にて入倉中）に本部より毎日衛兵勤務であった。営倉内は古参兵故に緊張の連続でした。二月一日より江北殲滅作戦に初めて参加。毎日が寒くて馬と共に苦労した。四キロ行進し十分間の小休止、馬に水を与え、昼食ともなれば馬と共に監視する。昼食を取る時間もない。四〇キロ行軍、やつと宿営。ゆつくり休めると思うが、夜は分隊の馬の手入れ、後片付け、夕食が終われば不寝番など、毎日毎日の繰り返しである。寒い間の江北作戦も終われば、三十一日に応山本部に帰着、馬の手入れ。翌日は古参兵の被服の洗濯、その夜は衛兵。体の弱い兵は皆病院行きです。

これまでは輜重隊、作戦時には歩兵に前衛、後衛、左右側兵に護衛され行動したが、いよいよ自隊で独断行動せよと司令部より命令を受け、四月十六日、江南作戦出発と同時に毎日輸送するのに苦労した。四〇キロ進んで宿営、良民の家の中で火を焚き、衣服を乾かし、翌朝出発時には半乾きのそれを着て出発、二十三

キロ行軍すればまたずぶ濡れである。敵弾は雨が降るように飛んでくる。小銃分隊は応戦する。夜は渡河。馬を対岸に渡し、また戻り船に装具を積み込み、向こう岸に着くと寒いので、岸辺において焚き火し暖を取り、濡れている軍服を着て荷物を積出し出発する。一日に二度も渡河したこともあった。雨期でもあり、他の部隊のところは通らず、畑であろうと道なきところを行軍する。

雨が降るので馬共々被服は土まみれ、宿営地に着けば馬の水洗い、軍服も水洗いし、良民の家の中で焚き火し、周りには積載品、軍服は戦友と二人でしぼり、縄を張り乾かす。当番兵は夜一睡もせず乾かさねばならない。宿営地に着くと各分隊ごとに炊事をして食べなければならぬ。

二カ月間の作戦も終わり、応山本部に帰るなり功績主事・服部中尉殿の当番兵を受け、上官に報告、勤務いたしました。

七月十日より江蘇省鎮江から補充馬廠に中尉と共に

馬の教育に出張した。十月十日に教育を終え、本部に帰ったのが十八日。常德作戦に本部は十四日に出発しており、帰隊次第追及するよう命令が出ていたので装具を整え、二十二日に追及すべく出発した。本部は一日四〇キロ追及するには五〇キロ進まなければならぬ。非常に苦勞したが、本隊に追及し安堵しました。常德作戦は情況が非常に悪く、敵弾は雨霰のごとく飛んできた。行軍中、山に入り五日間も食糧はなく、草を食べ木の根をかじったことを思い出す。

昭和十九年四月二十九日、最後の長い湘桂作戦に突入、応山出発。廣水、漢口、漢陽、長沙、衡山、衡陽、東陽、零陵、全縣、道縣、桂林、柳州、宜山、思恩と応山出発以来八カ月の大作戦、湖北省、南支の廣西省南寧における警備や特務班として勤務し、良民証の係を受け持ち、良民たちと仲良くなりましたが、昭和二十年三月まで、南寧、反転作戦、衡山県天門前にて負傷、八月十五日終戦となるが両足が負傷であったため歩くこともできず残念でした。今もお国のためと信じております。

【解説】

第三師団輜重第三連隊に召集された執筆者が中支の駐屯地に到着したのは第三次大別山作戦中の留守であったという。第三師団は第十一軍隷下の作戦部隊であるから、数多くの戦闘に参加している。昭和十二年九月、呉淞鎮（上海）上陸以来、上海付近の会戦、南京攻略戦、徐州会戦、襄東会戦、宜昌作戦、予南作戦、長沙作戦、確山作戦、第二次長沙作戦、浙贛作戦、大別山作戦と続く。その大別山作戦は、昭和十七年十二月十日～十八年一月十六日までであった。

吉田氏の初陣「江北殲滅作戦」は、第十一軍が漢口、岳州、沙市を連ねる揚子江北岸三角地帯の敵を覆滅し、王頸戩第一二八師長を捕獲し、一部を以て沙市対岸及び石首、華容付近の江南要域を新たに占領した作戦である。

本作戦は第十一軍の昭和十八年最初の作戦であるので、「一号作戦」あるいは一部では「湖北作戦」とも称されている。

参加主要部隊は第十三師団（鏡）主力、第三十四師

団（樅）南昌西方地区行動、第四十師団（鯨）主力、第五十八師団（廣）主力である。第三師団は「塘支隊」が参戦している。支隊の編制は次のとおりである。

支隊長 第三步兵团長 少将 塘 真策

歩兵第六連隊（第二大隊欠）、歩兵第六十八連隊

第三大隊、野砲兵第三連隊第一大隊（一個中隊

欠）、工兵第三連隊第一中隊。ほか

第三十九師団（藤）より両角支隊

独立混成第十七旅団（峯）より歩兵二個大隊基幹

第六十八師団（檜）より独立歩兵第六十一大隊

軍直屬部隊、独立山砲第二連隊、野戦重砲第十四

連隊一部、独立野戦重砲兵第十五連隊一部、独立

工兵第二連隊、独立工兵第五十五大隊、

飛行第四十四戦隊。

第一期作戦

塘支隊は二月初旬応山周辺の各駐屯地を出発、徒歩行軍で応城、天門、沙洋鎮を経、二月十四日董家場に集結、作戦準備完了。

第二期作戦

塘支隊は余家埠付近に態勢を整え、二月二十一日薄暮同地出發、暗黒の中を田圃を歩き水流を渡り、堤防を上り下りしつつ北門街、満部頭付近を東北に向かい前進。二十二日黎明、万福寺付近で突然、角形大堡壘より迫撃砲の乱射を受ける。築場大隊は保皇南方水田から攻撃を開始したが、敵の瞰制下にあるため、第九中隊を率い敵前を斜行して堤防方面に移り、手榴弾戦を繰り返した末、〇九〇〇頃同堡壘を占領す。

大隊は引続き北口街の敵陣地を撃破し東進、同夜陳家祠堡壘を占領し、捕虜八〇名のほか迫撃砲、重・軽機多数を鹵獲、さらに東進。この間、支隊主力方面において二十三日までに満頭、李家廟、三聖巷の各堡壘を攻略した。

支隊はさらに南側地区を、主力は府場、謝仁口に沿う地区を攻撃。築場大隊は二十三日施家漢突入、二十四日謝仁口を占領し峯口方面に対する包圍態勢を完整した。軍は峯口を占領し、第四十師団は二十五日、戴市東方約二キロ付近で王師長を捕らえた。作戦開始以

来二月二十六日までに判明した戦果は、遺棄死体二二〇〇、俘虜三七五〇、迫撃砲三〇、重機一六、その他を鹵獲した。第三次作戦後、支隊は二月二十八日朝、府場付近から反転し、三月四日監利西側地区に集結し、次期作戦を準備した。

以上が吉田氏が初めて参加した江北殲滅作戦における第三師団関係の概要である。

わたしが一番

きれいだったとき

山口県 土網 輝 男

一、宇品港での姉との別離

広島在住の姉・邦子は入隊以来、毎日曜日の面会時間には必ず不自由な配給食品の中から作った「おはぎ」の差し入れをして慰め励ましてくれた。しかし郷土部隊在留もわずかの期間で、外地出陣の命で部隊は宇品港に向かう。